

(6) 『向陵時報』、『校友会雑誌』、そして『青春ノート』

加藤の「執筆活動」は第一高等学校時代の『向陵時報』に始まる。4点の映画評と8点の劇評、小説3点（「小酒宴」1938年1月17日、「熱川にて」同年5月30日、「こんな男」同年9月20日）、詩歌2点（「アドバルーン」「童謡を唱った青年」38年11月11日）と評論1点（「戦争と文学とに関する断想」1939年2月1日）を寄稿した。「小酒宴」は宴会など日本社会に根づく習慣に対する揶揄があり、「戦争と文学に関する断想」は反戦の立場からの文学者、インテリの役割を論じた作品であり、いずれものちの加藤を髣髴とさせるものがある。

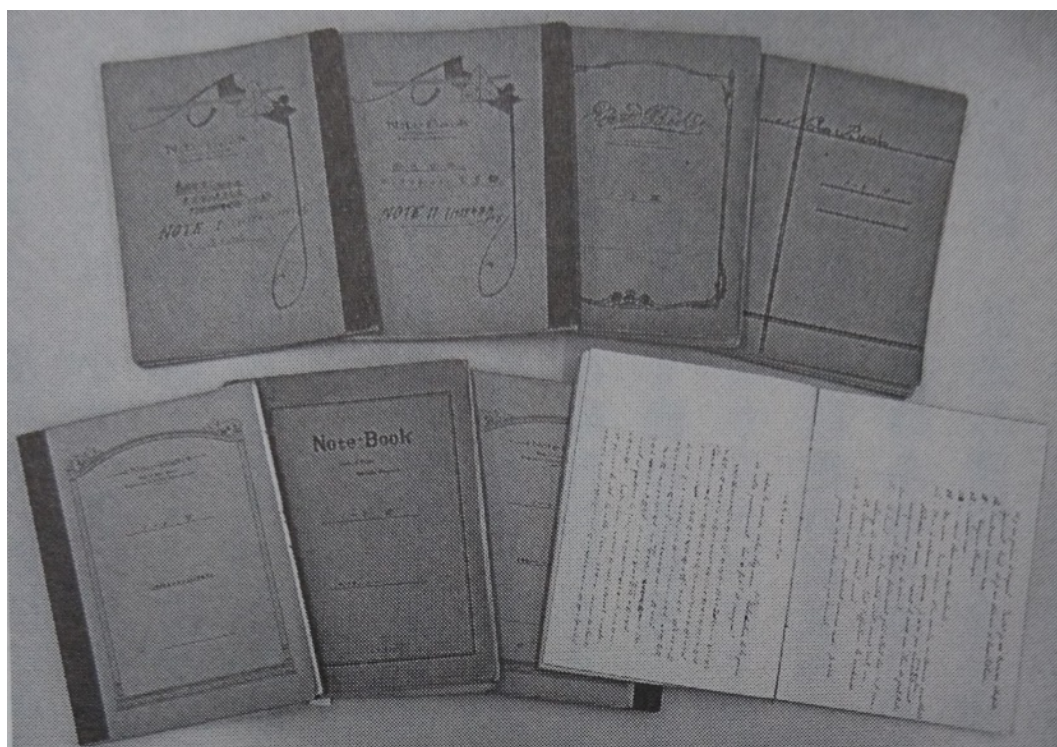
3年時に文芸部委員となって他の3人の文芸部委員とともに『校友会雑誌』（下写真）の編集にあたる。そして同誌に3つの小説（「正月」1938年2月、「従兄たち」同年6月、「秋の人々」同年10月）と「編輯後記」を寄稿した。



親友中西哲吉の書いた小説をめぐる筆禍事件が起きた。文芸部長沼澤龍雄が中西の作品の

掲載を認めず、一方、中西も改稿に応じず、原稿取り下げ、新たな作品へ差し換えることとなった。このときの加藤の編輯後記は、中西の作品を褒めたたえ、沼澤部長に対する皮肉たっぷりの文を書いた。これもまたのちの加藤を思わせる。

執筆活動と並行して「ノート」(下写真:8冊の『青春ノート』)を1937(昭和12)年から採りはじめた。このノートには順不同で、小説、詩歌、日記、評論、読書ノートなどが記されている。そのなかのいくつかは発表作品の草稿として書かれた。



『青春ノート』を繰ると、加藤の読書生活の一端が垣間見える。一高在学時代のノートは「ノートI」から「ノートIV」

まで。この4冊に記された読書の記録を読むと、当時の加藤が関心をもった問題が見えてくる。それは、第1に戦争である。加藤の青春時代は戦争とともにあり、ヴィットコップ編『ドイツ戦歿学生の手紙』、カロッサの従軍日記『ルーマニヤ日記』、レマルク『西部戦線異状なし』、そして石川達三『生きてゐる兵隊』や火野葦平『麦と兵隊』などの戦争文学を読んだ。第2に「インテリ」=知識人の在り方を考えたことである。小林秀雄を読み、ポール・ヴァ

レリーから学んだ。第3にフランス文学、芥川に導かれてフランス文学の森に分け入った。

第4に日本の詩歌、ことに鎌倉時代の詩人——定家とその弟子実朝などへの関心は深かった。

これらの主題を加藤は生涯もちつづけた。第一高等学校時代の加藤には早くも「加藤周一」が芽生えはじめていたのである。